

# 論文要旨

学位論文題目 キャリア形成における高校キャリア教育の役割

氏名 辰巳哲子

本論文は、高校生の卒業後の職業生活・学習生活への円滑な「移行」において、特に2000年以降に推進されたキャリア教育を通じた高校のキャリア形成機能を明らかにすることを目的としている。

1990年代後半から、新規学卒者の「学校から仕事への移行」をめぐる状況は大きく変化した。1990年代前半までは、「いい学校を出て、いい企業に就職して勤め上げる」という日本型雇用慣行を前提に、高校は進学や就職における選抜に有利になるような学力を獲得させることに重きを置いていた。しかし、1990年代後半ごろから、自分のキャリアを自分でマネジメントできる人づくりが求められるようになった。すなわち、現代の学校では、配分機能よりもむしろ社会化機能への期待が多くなっている。しかし、個人のキャリア形成に対して、高校がどのような機能を持つのか、現代の高校教育の役割について分析した研究はまだ少ない。

キャリア形成における高校キャリア教育の機能を捉えづらくしている要因の一つは、我が国のキャリア教育がその目的を「適応」「働く意欲の向上」「基礎力の醸成」と変更しながら進められたことにある。さらに、高校進路指導の内容は学校ランクによって異なるとする研究もあることから、同じ「キャリア教育」であってもその内容は多義的なものであることが想定される。そこで本研究では、キャリア教育がいかに多義的なのか、全国の高校に調査した結果を分析し、各高校で実施されている「キャリア教育」の目標をまず明らかにし、卒業後の状態を規定している高校の内部要因について分析した。

また、本研究では、キャリア形成にかかる高校の社会化機能について、これまでのような教師がある正解をもって生徒に伝達する方法ではなく、個人主導の主体的なキャリア形成機能に着目する。高校で同じ学習経験をしていたとしても、その経験をどのように意味づけるかによって、各個人の得ている学びが異なるからである。そのため、Moon (2004) の内的経験の枠組みを用い、高校での経験がどのように個人に意味づけられたのか、という内的経験と卒業後の適応・働く意欲・基礎力との関係を明らかにした。

本論文は3部9章から構成されている。

第一部は、理論的検討である。第1章は、現代のキャリア教育研究の射程の拡大および、キャリア教育研究が領域横断的な性格を有している点について理論的な検討を行った。キャリアとは「個人がその人生を通じて持つ一連の経験であり、内的には本人の意味づけである」と定義される(川喜多 2014)。自主的なキャリア形成が進む時代においては、キャリア形成において個人の選択や主体性を考慮する必要があるが、従来の進路形成研究は、学校選択や職業選択に至るプロセスを重視しており、個人のキャリア形成機能を十分に説明できるものではなかったことを示した。第2章は、教育経済学および教育社会学における教育効果の研究は、学歴から学習歴へとその視点が変わってきていること、高校におけるキャリア形成機能を捉えるには、国レベルのキャリア教育政策が高校で実施されているキャリア教育内容をどのように変容させてきたか、明ら

かにする必要があることを指摘した。

第二部は、政策および高校教育の移行機能について検討した。第3章は、移行教育政策は、国や企業からの要請によってその定義や概念に変化がみられることについて考察した。第4章では、政策レベルの議論が、高校レベルでどのように解釈され、実践されているのか、全国の高校に対する3か年の調査分析をおこなった。分析結果から、高校キャリア教育の内容は、国の方針変更によってシフトしており、「適応」「働く意欲」「基礎力」と少なくとも3種類の目標のもとに実施されていること、教育課程の内外の両方を視野に入れた分析が必要であることを明らかにし、第三部の実証研究の枠組みを示した。

第三部では、高校でのいかなる経験がその後の適応を促進するのか、実証的に検討した。第二部で検討されたキャリア教育の枠組みに沿って、「適応」「働く意欲」「基礎力」それぞれについて、高校のキャリア形成機能を検討した。第5章では、高校での「意図的なキャリア教育」として、キャリア教育カリキュラムが、大学での働く意欲、および適応に対してどのような効果があるか、検討を進めた。その結果、高校のキャリア教育カリキュラムは適応に正の有意な影響があるが、働く意欲には弱いながらも負の有意な影響をもたらしており、高校で働くことをどのようなものだと意味づけたかが大学での働く意欲に影響していた。

第6章・7章・8章・9章では、個人が経験に意味づけながら自己形成するキャリア教育の効用を検討した。高校での内的経験について、高卒者の職場適応への影響（第6章）、大学適応への影響（第7章）、働く意欲への影響（第8章）、基礎力への影響（第9章）を分析した。第6章では、「職場適応」を従属変数に、高校で経験した、教科学習・部活動・文化祭や体育祭・リーダー経験について、内的経験の効用を分析した。その結果、既存の教育課程上の取組が内的経験を促進していることが明らかになり、校内の経験機会を組み合わせることによって、集団スキルや対人面でのスキル開発に影響すること、文化祭を通じた内的経験を獲得することが職場適応を押し上げることを示した。第7章では、「大学適応」を従属変数に、高校における内的経験の効用を分析したところ、「他者との関係の築き方」を学ぶことが大学適応に影響していた。第8章では、働く意欲に影響する、高校での内的経験を分析した。入職時の仕事選択および入職後の働く意欲と職務成果を従属変数に、高校における内的経験の効用を分析した結果、高校の内的経験は入職後の働く意欲や職務成果に対して仕事選択を介して影響することが示唆された。第9章では、社会人に対する調査から、基礎力の獲得に学校段階の経験が影響していること、高校での教科学習からの内的経験は教科によって異なることを示した。

高校のキャリア形成機能は、従来型の受動的な社会化から、個人の能動的な社会化への変更が求められる。その際の高校の役割は、個人に対する経験からの学びの機会を設けることである。経験の特性によって、そこからの学習内容が異なることが明らかになっていることから、個人の課題にあわせた経験の組み合わせ、内省の機会を強化することこそが、今後の高校におけるキャリア教育に必要であると考えられる。